栄華を極めたソロモンでさえ

奨励	入 治彦〔いり・はるひこ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団京都教会牧師 京都刑務所教誨師

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思い悩むのか。野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思い悩むな。それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。

（ルカによる福音書　12章22―34節）

自然界と人間

ルイジ・コラーニというドイツで活躍しているデザイナーがいます。この人のデザインは、すべて曲線で描かれ、興味深いものが多いように思えます。一度この人のデザインしたボールペンを買ったことがありますが、それはちょうど鮫の形をデフォルメしたようなものでした。この人は自然をモチーフにしたものばかりで、自然界には直線がない、全部曲線だというコンセプトのもと、デザインしていました。この人にとっては自然がいつもお手本なのだなあ、と強く思わされました。

以前新聞を読んでおりましたら、動物はもちろんですが、植物でも付き合いが深くなりますと、花や観葉植物にも名前をつけて呼んでみたり、「元気か」と話しかけて育てている人が少なからずいる、と書いてありました。顔と顔の見える関係とでも言うのでしょうか、花と対話しながら、日々楽しく過ごしている方もいらっしゃることでしょう。動植物に話しかけるということで有名な歴史上の人物と言えば、アッシジのフランシスコを挙げることができるでしょう。神の道化師とまで呼ばれたフランシスコは、花や鳥、狼にまで説教をしたという逸話さえ残っています。

空の鳥・野の花

イエスという方はどうだったでしょう。フランシスコと同じように小鳥や花に説教をしたかどうかは、福音書を読む限りではわかりません。しかし、イエスは山上で説教をされた時、12人の弟子たちを前にしてこんな言葉を残しておられます。「空の鳥をよく見なさい」、また「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい」と。イエスという方は、野花や小鳥に教え諭すというよりも、むしろ空の鳥、野の花に人生のこと・真理のことを教えてもらいなさい、と勧められたのではないでしょうか。空の鳥や野の花が先生だということです。

さて、イエスが空の鳥、野の花と言われた時、それは一体どんな鳥や花を指して、お話されたのでしょうか。おそらく２０００年前のユダヤにおきましても、こういった動植物は存在していたでしょう。これについては、マタイによる福音書でよく知られていますが、この箇所に関してはより古い記録と思われる、今日のルカによる福音書12章を読みますと、こう記されています。「烏（からす）のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は烏を養ってくださる」と。鳥よりは烏と書いてある方がより具体的で古いと考えられると注解者たちは言っています。そもそも烏というのは、ギリシアのイソップ童話でも日本でも嫌われ者の代名詞になっていますが、ユダヤ・イスラエルでも決して好かれた鳥とは言えませんでした。やはり忌むべき鳥、汚らわしい鳥の一つに数えられていたくらいです。生物学的には、烏は鳩などと違って両足をそろえてチョンチョンと跳ねるので、鳩などよりはむしろ雀に近い鳥だということを聞いたことがあります。また、烏は頭が良くてゴミ袋などを２羽で助け合って運んでいくという話を聞いたことがありますが、悲しいかな、疎ましい鳥の代表として考えられてきました。

また、野の花は、ルカによる福音書では野原の花、これは以前は野の百合と呼んでいましたが、最近ではこれはアザミかアネモネのことを指していると言われています。以前、ガリラヤ地方を旅していた日本人がガリラヤ湖畔の丘一面に咲く野花を眺めていたところ、現地の人が、これはマリアアザミです、と教えてくれたそうです。七つの悪霊を追い出してもらったという「マグダラのマリア」のことを言っています。アザミの花は可憐で美しいけれども、鋭い刺がたくさんついている。当時の価値観からすれば、重い精神的な病を負い、人びとから疎まれた女性の名前であり、そこからつけられたのがマリアアザミだったのです。

であるならば、イエスの指す空の鳥、野の花とは何かロマンチックな花鳥風月にかかわるものというより、むしろ野生は野生でも一癖も二癖もあるものを指していた、と言えそうです。そればかりではなく、福音書はこんなふうにも伝えています。「烏のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない」「野原の花がどのように育つかを考えてみなさい」と言い、「働きもせず紡ぎもしない」、実に、烏、野原の花を形容するのに、５回も「―ない」という否定的な言葉を用いています。種も蒔かない、刈り入れもしない、納屋や倉も持たない、働きもしない、紡ぎもしない、というように、全く仕事をしない、経済的にはほとんど役立たずということ。無為徒食とでも言うのでしょうか、食べることは食べても仕事はしない。こうしてみますと、空の鳥、野の花とは嫌われ者で役立たずの価値なき者と言うこともできるでしょう。

どんなに小さい小鳥でも

ところが、そんな価値なき者を、取るに足らない者を、神はいらないと言って炉に投げ込むのではなく、目をかけ、手をかけ養ってくださるのです。明日は炉に投げ込まれるような運命の者であっても、神は美しく装いを施してこられたというのです。

子どもの讃美歌に「どんなにちいさいことりでも」（日本基督教団讃美歌委員会編『こどもさんびか　改訂版』日本キリスト教団出版局　２００２年）という曲があります。３番は「よい子になれない　わたしでも　神さまは愛してくださるってイエスさまのおことば」。よい子になれないわたしでも神さまは愛してくださるって、という歌詞がいいですね。

ひと昔前、テレビの番組「欽ドン」のなかに「良い子、悪い子、ふつうの子」というコーナーがあったのを思い出しますが、神様はなにも良い子だけを愛してくださるのではないのです。普通の子も、悪い子も愛してくださっています。ここに出席しておられる方は、皆さん良い子ばかりかと思いますが、なかには個性が強く規格外の人もおられるかもしれません。そういう人ほどまた、神様から愛されているのではないでしょうか。

私の家はクリスチャンホームではありませんでしたが、私は小学生のころから教会学校へは通っていました。親は私を近所のふつうの幼稚園に入れたかったのですが、募集の日、並んでいた私の目の前で定員となり、遠くの教会付属の幼稚園にやむなく通うことになりました。しかし、そこの先生方に親切にされ、主の祈りを早く覚えられたなどと言っておだてられ、教会にも行くようになりました。

私は小学生のころのことを今から振り返ると、やさしい人間になりたくて教会に通っていたのかなと思います。クラスメートとはよく取っ組み合いのけんかもしましたし、担任の先生からは「協調性がない。もっと友だちと仲良くするように」と書かれていました。家では動物の解剖のようなことばかりして、周りの者から「残酷なやつだ、冷たい人間だ」と言われていました。「あまのじゃく」だとも言われ、それは嬉しかったのですが、冷たい、残酷というのは受け入れがたいことでした。それでなんとかしようとしていたのかもしれません。ところが、もう少し大きくなって聖書を読んでいた時だったか、説教を聞いた後だったか忘れましたが、ある日「おまえは無理にやさしい人間になんかなるな！おまえは冷たい人間でいい。それがおまえの個性だ。そんなおまえをつくった私が責任を持とう」という言葉が飛び込んできたように聞こえてきたのです。その途端、肩の荷がストンと落ちました。人間失格だと思っていたのに、こんな人間でも生きていていいのだと言われたようで、やっと受け入れがたい自分を受け入れることができました。

生かされている事実

こんなどうしようもない者にまで、目をかけ心をかけていてくださる方がいらっしゃる、もったいないこと。詩編22編は「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥」（７節）と歌っていますが、そんな者にまで目を注いでいてくださる。人から忌み嫌われた烏にさえ目をかけていてくださる現実。私たちがこれからどう生きるか、こう生きようとあれこれ思い悩む前に、もっと悩んでいてくださる方がいて、選ぶと選ばざるとにかかわらず、すでに生かされてしまっている事実。私たちが親を選ぶ前に親がいて、私たちが考えようとする前に、名前がつけられているのと同じです。私の名前は、「入」（いり）という変な名字ですが、私がつけた名字ではありません。気がついたらそんな家に生まれていたということです。電話をしても、初めての人だと私が「入と申します」と話しても、「ゆいさんですか」「井伊さんですか」と必ずといっていいほど聞き直されます。そういう時にはもう、「入り口の入です」と言うようにしています。それでもわからない人には巻舌で「いりです」と発音しますと、「ああ、外国の方ですね」と言われ「もうどうでもいいや」という感じです。なかには封書に「入」ではなく、「人」と書いて送ってきた人もいました。もう慣れましたが。妻はまだ慣れないと言っています。

大切なのは、私たちがどう生きようか、こう働こうかという前に、まず私たちが生かされて「ある」という存在であるということです。エーリッヒ・フロムという人が、beのある文化とhaveのもつ文化というのがあると言っています。現代の悲劇は人びとが金をもつとか、地位を得る、人より何かをもつといった働き、機能に片寄り過ぎた結果、不幸が生じているというようなことを言っています。機能より「ある、存在する」といったことがもっと大切にされなければならないと言っているように思えます。

ただ神の国を求め

矢崎節夫さんというお医者さんは、若いお母さん方に、こんなことをよく尋ねるそうです。「あなたたちは、赤ちゃんを抱く時、どちら側に抱きますか」と。大抵のお母さんは、「頭の方が左側に来るように抱いています」と答えるそうです。なぜか、とその理由を聞きますと、「それは右手で他のことができるからです」と答える人が多いようです。しかし、矢崎さんは「頭が左側にくるように抱くのは、本来は右手が使えるようにするためではなく、お母さんの心臓の鼓動がちゃんと聞こえるようにするために、左側に抱くのです。そうすると赤ちゃんは安心するのです」と言っていました。現代人はどうしても、存在よりも機能をより重視していると思わされました。

29節以下には「あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思い悩むな。それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる」とあります。また、オリゲネスという神学者は言いました、「大事を求めよ、そうすれば小事は添えて与えられる。天のものを求めよ、そうすれば地のものは与えられる」（『増訂新版　新約聖書略解』日本基督教団出版局　１９８７年）と。

縦軸と横軸

隅谷三喜男さんというクリスチャンで経済学者だった人は、「内村鑑三と現代」（隅谷三喜男『隅谷三喜男著作集　第八巻』岩波書店　２００３年）という一文で語っています。内村鑑三という人は、群馬県の上毛カルタで「平和の使徒（つかい）新島　襄」と共に「心の燈台内村鑑三」と謳われている人ですが、この人について隅谷さんは次のように考えていたようです。イエスに留まるということは、この世という横軸に据えられた縦軸にたとえることができる。横軸だけでは絶えずその時々の流れに押し流されて真に生命ある何かを産み出すことはできない。縦軸のない日本では、昨日は軍国主義、今日は民主主義、明日は経済第一主義というふうにご都合主義になってきたのではないか。内村鑑三という人は、その縦軸をもった日本人としては珍しい思想家であった、と。このフレーズを読んで、震災後の原発の問題でも、命よりも経済第一の方に引っぱられているような印象がいたしました。

何を第一に求めるべきか、見失いやすいのが現代ではないでしょうか。ある人は言いました、「あんまり悩むのは人間の傲慢です」と。一番悩むべきことは、神御自身が私たち以上に悩んでいてくださっている。だから私たちは、明日を与えてくださる見えない方を第一に求めて、この世よりもむしろ天に宝を積むように生きていこうではありませんか。

２０１３年５月８日　今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録